

2021年2月21日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 49：2～21

ルカによる福音書 12：13～21

「自分のために富を積んでも」

<群衆の一人>

12章に入って、前回の1節には「とにかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスは、まず弟子たちに話し始められた。」とありました。イエスさまは、弟子たちと共に沢山の山の人々に囲まれていました。その中でイエスさまは、まず弟子たちに話し始められました。話はそこから53節まで続きます。

今日のところは、それを横で聞いていた群衆の一人が割り込んで来て、イエスさまに話し掛けてきた、という場面です。今日の箇所が終わると、次の22節にあるように、イエスさまは、また弟子たちに向かって話されます。さて、今日の群衆の一人が、割り込んで来てイエスさまに言いたかったこととは何でしょうか。

13節にはこうあります。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」この男は、遺産の分配のことで、イエスさまに自分と兄弟との間に立ってほしい。調停人になって欲しい、と願ったのです。

わたしたちからすると、何やら突拍子もない頼み事に思えます。しかし当時のユダヤ教では、宗教の指導者が律法に照らして、財産の問題や民事の揉め事などに介入し、指導するのは当然のことでした。ユダヤ教の指導的立場の人であれば、このような遺産問題は当たり前のように請け負い、関わってくれる事柄なのです。

男は、ファリサイ派や律法の専門家と渡り合うイエスさまを見て、この方なら兄弟を十分説得して、自分が遺産を必要なだけ受け取れるよう、取り計らって下さるに違いない、と思ったのではないのでしょうか。だから、何とかイエスさまにお願いしようと、機会を狙って話しかけたのです。

しかし、イエスさまはこのようにお答えになりました。14節「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」イエスさまは、そのようなあなたの遺産問題の調停には関わらない、と言われたのです。ここで、イエスさまがこれまでのユダヤ教の指導者とは違う立場であることが示されます。

そして続けて、一同に対してこう言われました。「どんな貪欲にも注意を払い、用心なさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」

厳しいお言葉です。どうして、イエスさまは関わって下さらないのでしょうか。また、男が訴えたことは遺産の相続のことで、ある意味、自分の正当な権利を主張するものです。「貪欲」とまで言われては、可哀想ではないでしょうか。

<貪欲>

さて、この「貪欲」という言葉ですが、わたしたちはこれを、非常に欲が深いこと、強欲、欲しいものに酷く執着すること、と理解します。辞書にもそう載っています。

そうであるなら、今日出て来たこの男は、自分が受けるべき、正当な遺産の取り分を望んだだけです。別に欲深いとか、貪るように欲しがっている、とまで言わなくていいのではないかと、思ってしまうのです。

しかし、イエスさまがここで仰る「貪欲」には、もっと深い意味があります。イエスさまは「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。」と言われた後、こう語られたのです。「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」

「人の命は財産によってどうすることもできない」とありますが、この「財産」という言葉は、もとのギリシア語ではただの「持ち物」という言葉です。つまり、金銭のことだけではなく、住まいも、健康も、人間関係も、仕事も、人の才能や能力も、その人の境遇と言われるものも、すべてが「持ち物」と言えます。

そして、イエスさまは仰ったのです。「人の命は、財産によってどうすることもできない。」

「人の命は、人生は、人間が自分で持っているものによってはどうすることもできないのだ。」

それは、わたしたちのそのような持ち物が、わたしたちの命や人生をどうにかできるものではない、ということです。

でも、わたしたちはこう思うかも知れません。いや、実際に何も持っていなければ、命を生きられないではないか。それに沢山持っている方が、良い境遇に生まれた方が、幸せな人生を送れるに決まっている。裕福な方が、生活も安定して、穏やかに日々を過ごせる。健康に恵まれている方が、より立派な仕事に就く方が、才能に恵まれている方が、充実した、豊かな人生を送ることが出来る。だから、自分の命のために、多くのものを持つことは大切だ。…これが、現実を生きているわたしたちの実感ではないでしょうか。

だからこそ誰もが、より良い物、より多くの物を手に入れたいと思うのです。豊かに持っている人でも、自分の将来のために、更にもっと欲しくなる。

そして、反対に貧しいならば、持っていないならば、それを手にしたいと願う。人が持っているのを見てうらやましいと思ひ、妬む思いが出て来る。あるいは、持っていない自分の境遇を恨んだり、もう未来はない、自分の人生はどうしようもないと諦めたりする…。

結局わたしたちは、お金を持っている人でも、貧しい人でも、自分の人生、自分の命を支えるためには、そのような自分の「持ち物」が必要だ。それが自分を支えるし、自分が何を

どれだけ持っているかで、自分の命にとって、安心できる人生か、不安に満ちた人生かが決まる、と思っているのではないのでしょうか。

だから、自分が何か得る権利を少しでも持っているならば、それをちゃんと手に入れなければならない。その権利を主張して、受けるべきものは受けなければ、と、イエスさまに調停を頼んだ男のように、必死に訴えるのではないのでしょうか。

しかしイエスさまは、そのように自分の命、自分の人生を支えるために、自分の持ち物を多く得ようとする。言い換えれば、自分の持ち物こそ重要であると考え、またそれに頼って自分の命を支えようとするを「食欲」と呼ばれたのです。そして、「どんな食欲にも注意を払い、用心なさい。」と言われたのです。

そして、このことを説明するたとえとして、ある金持ちの話をされました。

<ある金持ち>

ある金持ちの畑が豊作でした。自分が元々持っている倉にも入りきれないくらいです。だから、その倉を壊して、もっと大きいのを建てて、穀物も財産もみんなそこにしまっておくことにしました。

そこで、この人は言うのです。19 節、「こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。」

この「ひと休みして」という言葉は、口語訳では「さあ、安心せよ」と訳されています。金持ちは自分自身に言ったのです。もう安心だ。たくさん蓄えが出来た。もうこれから先何年も、この自分の倉の中のもので、十分命を支えていくことができる。次の年が不作でも、飢饉でも心配しなくていい。これで安心だ。自分よ、安心しなさい。あなたは何年も生活の心配をせず、生きていけるぞ。未来の命の保証が、この倉の中に十分あるぞ。

ところが、神さまはこの金持ちに言われるのです。「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」。

愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。取り上げるのは、神さまです。神さまが、すべての命を創造し、保ち、また取り上げることが出来るお方です。

この金持ちは、自分の持ち物で、自分の将来を保証し、自分の命に安心を与えたはずでした。自分の倉のもので、自分の命を養っていくつもりでした。しかし、命を今夜、神さまがお取りになる。その時、彼が持っていたもの、蓄えていたもの、「安心だ」と言っていたものはすべて、もう何の役にも立たないのです。彼の持ち物は、命を伸ばすことも、明日の彼に生活を与えることも出来ないのです。彼はただ、命を取られ、倉には持ち主のいない財産が残るだけです。

これは、何を意味しているのでしょうか。死と向き合った時、わたしたちが地上で、自分のために用意したもの、自分の命を支えようと依り頼んでいるものは、何の役にも立たない。だから蓄えても、何を持っていても無駄だ、ということでしょうか。

それなら、悲観的な人は、どうせ死んで、何も持って行くことが出来ないなら、地上で何を持って意味がない。労働しても、人より頑張っても、ただ空しいだけだ。そうやって、無気力になり、世を儂んで、厭世的になるかも知れません。

反対に、どうせ死ぬなら、もう好きなことを好きなだけすればいいんじゃないか。どうせ死んだら持って行けないなら、あるものは全部使って、楽しむだけ楽しんで、享乐的に生きればいいんじゃないか。そんな風に考える人がいるかも知れません。

しかし、どちらにせよ、最後に命を取り去られる、ということを見つめる時。わたしたちは、それならば、今をどう生きるのか、なぜ生きるのか、ということを考えさせられるのです。そして、命は、わたしという存在は、何のためにあり、何によって支えられているのか、ということ問われるのです。

<命を支えるものは>

イエスさまが見つめさせようとしておられることは、まさにこのことです。

神さまが、おまえの命を取り上げられる。つまり、すべての命を支配し、その一人一人の命の時を定めておられるのは、天の父なる神さまなのです。それならば、わたしたちにとっては、自分の命さえ、自分の持ち物ではありません。それは神さまのものなのです。

そうであるならば、わたしたちは、生きること、人生、自分の命について、自分の持ち物で良し悪しが決まると思っていることも、どうにか出来ると思うことも、どうにも出来ないと諦めることも間違っているのであって、すべてを神さまに求めるべきなのです。命は神さまによって支えられるものなのであり、人生は神さまに向かって生きるべきものなのです。

わたしたちの命の源は、造り主である神さまにあります。ですから、わたしたちの命を支え、人生を決定し、築き上げていくのは、自分の持ち物や、富や、境遇などではありません。わたしたちの命を支え、わたしたちの人生を築いていくのに必要なのは、命の支配者である神さまの恵みであり、この神さまとの関係に生きることなのです。そして、この神さまを褒めたたえ、礼拝し、賛美することこそ、造られたわたしたち人間の目的なのです。

イエスさまは、その神さまとわたしたちの関係を結ぶために遣わされたお方です。父なる神さまが、わたしたちがまことに命を生きるために与えて下さった、最大のものは、イエスさまご自身です。イエスさまの命です。

わたしたちは罪によって、命の源である神さまを忘れ、背き、自分勝手に生きる者となってしまいました。神さまとの関係を自ら断ってしまう者でした。その罪は、わたしたちの持ち物をすべて差し出しても、命をささげても、償うには全く足りないのです。

しかし、命の造り主である神さまが、わたしたちを憐れみ、愛して下さり、わたしたちの罪を赦すために、わたしたちの命を滅びの死から救い出すために、ご自分の御子であるイエスさまの命を与えて下さったのです。そして神さまは、このイエスさまを受け入れる者に、救いを受け入れる者に、聖霊を与えて下さり、神さまの子どもとして生きる命を、神さまとの親しい豊かな関係を、与えて下さるのです。

わたしたちの命に最も必要なものは、最も根底にあるべきものは、これなのです。

わたしたちが、神さまにおいてこそ、自分の命が支えられていることを知るならば。わたしたちは、起きている時も、眠っている時も、働いている時も、病んでいる時も、喜んでいる時も、悲しんでいる時も、いつも、神さまによって支えられていることを知るのです。

一日を生きるのも、神さまが今日という日に、わたしに新しい命を与え、目覚めさせ、食べ物を与え、生きるための仕事を与え、あるいは必要な備えを与え、わたしに生きることを望んで下さったから、生きているのです。そして今日の主の日には、神さまを礼拝し、神さまとの交わりを喜び、大切にするためのこの時を、神さまが備えて下さったのです。

やがて、神さまが命を取り去られる時も、神さまはその大きな愛の御手でわたしたちを抱き取って下さいます。神さまは御子イエスさまを十字架の死から復活させて下さったように、わたしたちにも、永遠の命と復活を与えることを約束して下さいました。そして終わりの日には、復活のイエスさまが、天の食卓に、わたしたちのために席を用意して、祝宴を開いて下さるのです。

この世で、人生で、わたしたちが命を支えるものを、自分の持ち物ではなく、神さまにこそ求めるなら。神さまにこそ安心を置くなら。それは死によっても奪われることはなく、その後さらに大きな恵みが、天に用意されていることを知るのです。

どんなに自分の手で豊かになっても、良い境遇に置かれていても、この命の支配者である神さまを知らないなら。この神さまが自分を愛して下さいていることを知らないなら。この方が与えて下さる本当の安心を知らないなら。それこそ、わたしたちの人生は不安と恐れに満ちたもの、空しいものとなるのです。

<神の前で豊かに>

最初に割り込んで、イエスさまに遺産相続について調停してもらおうとした人は、この神さまとの関係を与えるために来て下さったイエスさまを、自分の富のために利用しようとしたのです。イエスさまに、自分の財産のために働いてもらおうと思ったのです。

しかし、イエスさまはそのようなことのために来られたのではありません。イエスさまは、わたしたちの人生の望みを叶えるために来られたのではなく、わたしが人生において何を望むべきかを教え、またそれを与えるために来て下さったのです。

ですから、イエスさまに出会ったなら、むしろ、わたしたちの方が動かされ、変えられていくのです。イエスさまによって、神さまがどのようなお方かを知ること、自分のために多くの物を持つことに向かっていた人生が、神さまの方に方向転換させられるのです。

そして、生きるために必要なものは、これまでも、今日も、これからも、すべて神さまが備え、与えて下さること。命を支配し、与えるのも、取り去られるのも、神さまであること。だから、今日を生きているのは、神さまが今日、わたしが生きることを望まれた、その御心の中で生きているのだ、と知るのです。

そうであるならば、わたしたちは、自分が持っている物の見方も変わります。

多く持っていることが、悪い事だと言われているわけではありません。もし持ち物が有り余っているなら、それは自分の将来の安心材料として蓄えるためではなく、正しく管理をして、必要としている人と分かち合うために、また神さまの御業に用いるために、神さまが預けて下さったものなのです。

また、持ち物が不足している時も、わたしたちは不安に押しつぶされて絶望することはありません。命を支えて下さっている神さまが、必要を備えて下さることを信じて祈り求めるなら、わたしたちは成すべきことをしつつ、希望を持って、与えられるのを待つことが出来るのです。

ですから、神さまに命の支えを求める人は、人生は空しいものと自暴自棄になることなく、また自分の好き勝手に生きるのでもなく、神さまが愛し、喜び、与えて下さった今日のわたしの命を感謝して、与えられたものを大切に、精一杯、神さまに向かって生きることが出来るのです。

この神さまに、ますます信頼して生きること。ますます頼って生きること。それが、イエスさまが今日の最後の箇所で言われた、「神の前に豊かになる」ということなのです。

神の前に、というのは、直訳すると「神の中に」という言葉です。神の中に、豊かになる。神との関係の中で、ますます恵みを味わい、豊かにされていく。自分の持ち物ではなく、この神さまとの関係の中でこそ、わたしたちは、本当に豊かな命を歩むことが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちの命が、あなたの愛の御手の中に置かれていることを感謝いたします。

わたしたちを、神さまの恵みの中で、ますます豊かに生きる者として下さい。

しかし、わたしたちは現実の生活の中で、満たされていれば、感謝すること、今日の糧を祈り求めることを忘れ、不足していれば、すぐ不安になって取り乱してしまいます。いつも自分の持ち物を見つめ、それに依り頼もうとする歩みをしてしまいます。

どうか、神さまがわたしたちの命の主であること、わたしたちの命を支えて下さる方を、忘れることがありませんように。

わたしたちの命も、与えられている物も、あなたからのものですから、神さまの御心のために、神さまに喜ばれるように、用いることが出来るよう、聖霊の導きを与えて下さい。

そして、すべての者が、命の主であるあなたを喜び、礼拝して生きる、本当の人生の目的を知ることが出来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン